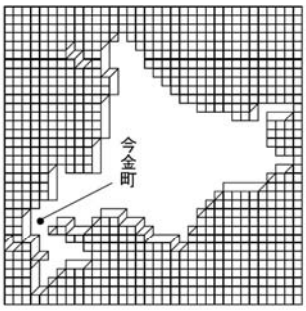
連載



あのマチ このムラ・地域おこし活躍中 No.44

今金町の事例

―農業の町であるという気持ちをひとつに町づくり―

美利河ダム

JR長万部駅前を発ったバスは、国縫の町中を丁寧にたどってから噴火湾を背に山あいに入って行く。茶屋川を過ぎ、ゆるいカーブを繰り返し、しばらくすると今金町の標識が現れる。稲穂峠（通称・美利河峠）だ。下りに差しかかるといきなり目の前に長大な堰堤のダムが現れる。あっけないほどに峠は低い。低いはずだ、標高は一五〇メートルほどしかない。この峠の低さが今金農業の命運を左右しているとは、あとで知ることとなる。

美利河地区。今金町内を東西に貫く利別川の上流域にあたるが、町域の開拓はこの地区における鉱業の開拓が先駆とされる。砂金の産出地として江戸時代寛永年間から多くの和人が入地していた。明治に入ってからは少し下流の花石一帯も含めて金ばかりでなくメノウやマンガンも採掘され大変な賑わいを見せたという。再び注目を集めることになったのは、洪水調節施設として昭和五十四年に着手され平成三年に完成した美利河ダムの出現だ。ダムの竣工にあわせて、周辺の環境整備計画の一環としてスキー場・温泉・プールなども施設され、滞在型リゾート「クアプラザピリカ」が誕生した。

ピーク時（昭和三十年代）一二、五〇〇人だった町の人口が平成二年当時には八、〇〇〇人に減少するなど、過疎の波が押し寄せるさなかにあって、まさに観光による町の活性化の目玉として期待を集めることとなった。

ダムがこの地区にもたらしたものに「山村里親留学制度」がある。水没する美利河小学校が新築されたのを契機に、平成二年、四軒の里親に協力を願って

美利河ダム

に知られているので希望者は多いのだが近年里親の確保が難しくなっているという。「スタートから一六年、今後いつまで続けられるか里親次第です」と、町では心配している。

一〇名ほどの都会の子供達を留学生として受け入れた。一年間、美しい自然の中で都会の子供達が地元の子供達と暮らす。全国各地、沖縄や九州からも、これまで百名以上の子供達が心身ともにたくましい子供に育って巣立っていった。現在は地元児童三名・留学生八名の一一名が三軒の里親の元から通っている。テレビでも取り上げられ全国的

ブナの森

美利河ダムからさらに北へ一〇キロメートルほど入った奥美利河温泉は、秘湯ブームで人気のスポットとなっている。かつては車を降りて五〇〇メートルほど歩かなければ温泉にたどり着かなかったが、最近車道が温泉まで延長された。ロッジ風の宿泊施設と温泉施設を取り巻くのは、ブナの森だ。奥美利河温泉の周辺は、美利河二股自然休養林としてブナ林浴が楽しめる。丸山展望台を経て長万部側の二股温泉へ登山道もついており温泉のはしごもできるようだ。

東北地方の白神山地が世界的にも貴重なブナの森ということで世界遺産になって以来、ブナの森の愛好家が増えている。本誌第四四号で黒松内町の「北限のブナ林」にまつわる地域起こしが取り上げられているとおり、渡島半島は北海道では唯一ブナの森が広がる地域である。環境庁作成の流域現存植生図によれば、利別川本流・支流の流域はチシマザサ・ブナ植生となっている。今金町総面積五六、八一四㌶のうち、林野面積が四四、七〇七㌶、林野のうち天然林は三〇、一五六㌶で、そのほとんどがブナの優勢な広葉樹林帯だ。

早春の利別川源流

ブナの森はその美しさとともに豊かな恵みについても注目されている。豊富な落葉の堆積が肥沃な土壌を作り、さまざまな生き物をはぐくむ。とりわけブナの森で涵養される水源をもつ清流はその流域に多くの自然の恵みをもたらすといわれている。東北から北陸にかけて「コシヒカリ」や「あきたこまち」を生んだ名だたる米どころが、いずれもブナの森を源流に持つ川の流域であることも周知の事

実だ。

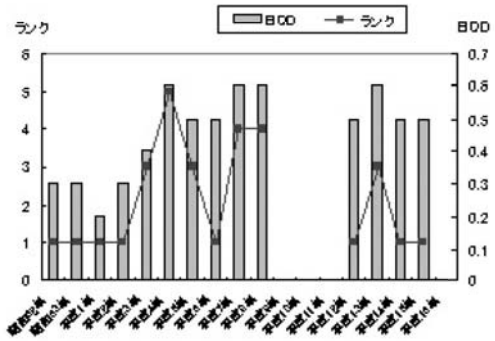
日本一の清流

利別川は清流日本一の草分けである。国土交通省はBOD濃度を測定し全国の河川の水質汚染の状況を調査している。BODは「生物化学的酸素要求量」といわれるもので、河川における有機物による水質汚染の指標となっている。清流では水中の有機物の量が少ないため、微生物が消費する酸素量も少なくなり、BODの値は小さくなる。

全国の一級河川本川・支川一六六河川を対象として水質ベスト五が昭和六十二年から公表されているが、利別川は公表が始まって以来、四年連続で日本一となった。しかし平成三年からランクを下げ、平成九年～一一年にはベスト五からも消えている。平成三年は美利河ダムが完成し美利河地区に「クアプラザピリカ」など相次いで施設が設置された年であり、その影響があったのだろうか。

利別川はその流域が町域とほぼ一致しているのでまさに今金町の川といえる。「NPO法人後志利別川清流保護の会」をはじめ町民グループが河川清掃や堤の植栽など川を守る運動に立ち上がった。その努力が実って、平成十二・十四・十五年には清流日本一を取り戻している。

清流は美利河から今金の市街へ向かって花石・中里・住吉など山間地域を蛇行している。利別川の「利別」とはアイヌ語の「トシュベツ」（蛇川、縄川。後志利別川が激しく蛇行して蛇のように、縄のようになっている形をいう）から転化したものだそうだ。種川を過ぎると周囲は開け、河道改修され直線的に今金・北桧山を経て日本海に抜けている。



利別川水質ランク・BOD濃度の推移（ランク5位以内のみ）

利別川全流域

複合型農業への歩み

今金町の開拓は利別川を日本海から遡って始められた。明治二十四年、犬養毅ら七名が貸付を受けた利別原野を同志社学生・志方善之らが代耕を契約し、キリスト教の理想郷建設を目指して神丘地区に入植したのが、本格的な開拓の始まりといわれる。「利別原野は人跡を見ない未開の土地で、（中略）志方の入植した明治二十四年には、彼等を含めて八二戸、百数十名の者が、広大な利別川流域の鬱蒼たる樹林の間にまばらに定住しているに過ぎなかった。」とは、志方善之の妻となった日本最初の女医「荻野吟子」の生涯を描いた渡辺淳一の小説「花埋み」のなかの一節だ。

明治二十六年には町名のゆかりとなった今村藤次郎、金森石郎らがチプタウシナイ（今金）に入り開拓を開始して、当時利別といわれていた今金の基礎を作った。

今日の今金農業は、まわりを山に囲まれた中山間地の複雑な地形を背景として、多様な作目で構成される複合型農業がその特徴となっているが、これまでに至る固有の歴史があった。

清流・利別川

明治期は無肥料・連作でおもに大豆・麦・トウモロコシ・馬鈴しょが作られていたが、地力増進のため輪作や畜産の振興が図られるようになってきた。第一次大戦中の好景気には輸出用の大豆・澱粉用馬鈴しょ生産が急増、豆成金・澱粉成金も現れたが景気は長く続かず、農村景気は低迷した。

昭和五年、国鉄瀬棚線の開通により生食用馬鈴しょの出荷が可能となり、本州はもとより満州にまで移出された。一方、大正期には水稲生産が定着しており、戦前は水稲・馬鈴しょ・大豆の三作が主要な作物となった。地力増進のため乳用牛の飼養がはやくから始められていたが、昭和十七年には総農家の約半数が牛飼養を行なうようになった。

戦後、利別川流域の造田開発が盛んに行なわれ、水稲の収穫高が急増した一方で、麦・大小豆・てん菜などの畑作は衰退した。しかし昭和二十八年に品種を男爵に統一した優良種子馬鈴しょをはじめ、町内加工場向けアスパラガスの生産や丘陵地・山間地の酪農業が盛んになるなど、地区に応じた多様な展開が行なわれた。

昭和四十五年から始まる減反政策により水稲作付面積は大幅に縮小した。当初転作作目は馬鈴しょが中心だったが、輪作維持のため豆類やてん菜の作付が増加した。減反政策への対応を直接契機として、昭和五十五年策定の第一次農業振興計画において「専営型経営から複合型経営へ」をスローガンに、野菜および肉用牛の導入による地域農業および農家経営の複合化が推進された。一九八〇

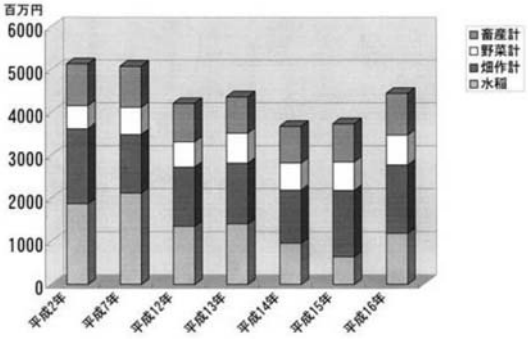
年代後半には大根など露地野菜が増加し、その後軟白長ネギやミニトマトなど施設野菜も増加して、平成二年には野菜粗生産額が全体の一〇％を占めるようになった。

農業振興計画

第一次農業振興計画において本格化した複合型農業の強化と発展が、その後の農業振興計画の柱となっている。今金農業は、町と農協、道・普及センターなど関係機関の手になる農業振興計画とともに進められてきた。

平成九年度スタートの第四次農業振興計画書の中で語られる計画作成指針が、これまで目指ざしてきた今金農業の基本方向を要約している。

まず、米の減反、牛乳の生産調整、畑作四品の作付指標による生産調整のもとで、選択しうる今金農業生産拡大の道は、野菜のみであるとしている。そのうえで基幹品目である稲作・畑作・野菜・畜産について、振興すべき方向を提示している。稲作では、複合経営の根底に位置する米生産を質量ともに強化し「良質米産地の確立」を図ることを課題としている。畑作では、今金男爵の品質向上に寄与してきたこれまでの輪作体系を基本としながらも、園芸や畜産と組み合わせた「高収益集約型畑作の実現」が重要だとしている。野菜では、振興作物を絞り込み、市況に一喜一憂せず持続的拡大を図り「産地間競争に勝ち抜く野菜産地形成」が重要だとしている。そして畜産では、基幹となる稲作・畑作・野菜いずれも土づくりが基本的な課題であり、畜産との結合が不可欠であることから「地域農業の基礎部門としての畜産」として維持することが必要だとしている。また、これらの実現に向けて、野菜だけでなく米や酪農・肉牛についても広域的産地形成の思想を取り入れる必要があること、顕在化している労働力不足・低コスト生産対策のためにも機械の共同利用やリース、作業受委託の支援システムが必要になってくると思われるとしている。



今金町農業粗生産高の推移

こうした方針のもと農業振興に努めた結果、今日では稲作・畑作・野菜・酪農畜産など多彩な農業が営まれ、「今金米」「今金男爵」「軟白長ネギ」「今金牛乳」など多くの逸品を生み出してきた。

ちなみに平成十六年度における農業粗生産高は、総体で四四億五、〇〇〇万円、うち水稲一億八、八〇〇万円・畑作一五億八、七〇〇万円・野菜七億三〇〇万円・酪農畜産九億七、二〇〇万円となっている。このうち特産の今金男爵は一〇億一、一〇〇万円である。また農家戸数は四五八戸、うち専業一三九戸・第一種兼業二五〇戸・第二種兼業五二戸。また、経営耕地

規模別農家数は五㌶未満が一一四戸、五～一〇㌶が一五一戸、一〇～三〇㌶が一六九戸、三〇㌶以上が一七戸となっている。

美利河峠の功罪

近年、農家戸数の減少や担い手の高齢化、地力の減退などにより、目標とする生産が確保できない事態も起こっている。特に戦略部門として取り組んでいる野菜の生産が、思うように伸びていない。加えて冷災害にも見舞われている。

ＪＡ今金町　小田島さん

「米価がこれだけ下がっているので米作農家の所得確保のため野菜の導入を図っている。米主体の農家はどちらかというと中小の規模で兼業が多い。作業が比較的楽な米と雑穀だけを作って、手間のかかる野菜は作ろうとしない傾向がある」。ＪＡ今金町で営農・農業経営を担当する小田島さんは、野菜作拡大の難しさをこう語る。

大根の作付面積はピーク時の九〇㌶から六〇㌶に減っている。人参も思うように伸びない。いずれも収量が不安定で価格も取れないことがあるからだ。檜山北部広域農協連として「ほこほこ大地」ブランドで共同出荷している作目であり、目標数量の確保が課題になっているが、平成十九年以降の品目横断的経営安定対策が契機となって、農家経営の安定化のために、これらの作付が増えることになるのではと期待している。

米は、良質米・良食味米生産に取り組み、大きな成果を得た。関東・関西から今金産米として産地指定を受ける銘柄米となった。ガイドラインの格付けも五ランクまでアップしたが、平成十四年・十五年と二年連続の不作がひびき、ランクダウンしてしまった。両年ともに全道的な天候不順だったが、檜山地方の作況指数は全道平均を下回る八九、四三という数値だった。

平成五年の大冷害のときは檜山地方の作況指数は二、収穫はほとんどなかった。この年は全道では四〇、日本海側の留萌管内がいちばん良くて六二。利別川流域は、道南に位置する日本海側の米どころというイメージがあるが、昔から冷害や水害に悩まされており、米作りは自然相手の戦いと克服の歴史であったようだ。

「ここは太平洋（噴火湾）からのヤマセの常習地帯。狩場山と遊楽部岳に挟まれてしかも噴火湾沿いの山が低いのでヤマセが吹き抜ける。平成五年はもろにやられた。しかし皮肉なことにイモや大根はすごく良かった。これらは冷涼な気候を好む作物なのでこの地帯にあっているのだろう」。

どうやら、米の冷害物語もあとで出てくる今金男爵の美味物語も、美利河峠があまりにも低かったがために誕生したといえるようだ。

可能性を秘めた新しい取り組みも芽生えている。立茎アスパラガスの導入や鶴の子大豆の生産拡大に力を入れている。特に鶴の子大豆は、商品としても輪作体系を維持する上でも有望な作物として、小田島さんの期待は大きい。

「鶴の子大豆は『ユウズル』という品種で、道南でしか栽培していない。かつては厚沢部地方でも作っていたが今ではほとんど今金だけだ。大粒で香りがよく納豆にすると美味しい。豆腐も評判がいい。しかし皮切れしやすく機械収穫が出来ないのが欠点。皮切れしない新品種を減農薬で栽培できるようになれば今金特産として新たな目玉作物になると思う。豆腐原料として京都に売り込みにいくのが夢だ」

今金男爵物語

今金男爵紙芝居

今日まで今金農業をリードしてきたのが今金男爵だ。東京都中央卸売市場や大阪など全国十数か所の指定された青果市場にしか出荷されない稀少品。道内各産地から出荷される中でも別格で、常に最高価格で取引されその価格は馬鈴しょ相場の基準価格となっているといわれる。この日本一と評価される「今金男爵」の物語が学校の先生によって紙芝居になっている。ストーリーを追って今金男爵の歴史を紹介する。

馬鈴しょ兄妹の「男爵君」「いも子ちゃん」が、「おじさん」「おばさん」「農協の部長」に「今金男爵」についてのいろいろな話を聞いていく。南アメリカ・アンデス原産の馬鈴しょが世界中で栽培され、日本に伝わり、そして北海道に男爵イモが定着するという歴史をひも解くところから物語は始まっている。神丘地区に開拓者が入って以来自家食料として栽培された馬鈴しょは、沢山とれても余れば捨てるしかない。そこで馬鈴しょをでん粉にして売りだす工夫が始まり、明治末期には町内に相次いで澱粉工場が作られた。このように最初は自分達で食べる以外は全部澱粉に使われていた。国鉄瀬棚線が開通すると食用の馬鈴しょが遠くまで出荷できるようになり、今金からは男爵・紅丸・メークィーン・エゾ錦の四種類を主に本州に出荷した。利別の男爵イモは沢山粉を吹いて甘味があってとても美味しいと評判になった。第二次世界大戦が始まると本州だけでなく満州にも輸出されるようになり、どんどん栽培面積も広がって檜山一のジャガイモ産地になった。

戦争が終わり食糧不足の中、農作物の増産に立ち上がったが、主要作物になっていた米が昭和二十三年から二十六年にかけて冷害や水害の繰り返しで思うように取れなかった。そこで農協と農家で話し合って畑の面積を広げて馬鈴しょ生産をさらに増やす努力が行われた。北海道でベスト5に入る生産量になった。いろいろな産業に活気が出てきたが、農業がいちばん重要な産業だということで町をあげて農業の振興に取り組んだ。

昭和二十八年、農協は本州の大きな町で売り込む目標をたて、馬鈴しょは男爵イモだけを栽培することに決めた。戦前から今金の「エゾ錦」も本州でよく知

られていたけれど、都会向きの料理の味を考えると、今金の土地と気候にあった男爵イモが一番優れていると考えたからだ。

農協の曽我井組合長はみずから市場開拓に本州に乗り込んだ。市場視察では、評判になっている道内の他の産地のイモは、農協が共同選別を行い規格統一していることを知る。

取引は信用が一番と、今金イモのクレームがあれば、たとえ二～三個のことであっても責任者を派遣して説明を求めに飛んで行かせた。イモのどこが悪いのか真偽を確かめ、誠心誠意で対応した。三年ほど続けるとほとんど苦情もなくなった。クレームがあるとお詫びにイモ俵を送って済ます産地もあり、そのためオーバーな苦情もあったようである。こうした戦後の流通上の悪い習慣を払いのける努力もしたのだ。

自信を得た農協は昭和三十年「今金男爵」という名前で全国に販売を広めていった。一方で、有名になるとイモを送らせて金を払わずに騙し取ろうと詐欺を働くものも現れたそうだ。

昭和四十年代初めに、販売拡大をするための宣伝に農協独自の今金男爵シールを作った。消費者と生産者・農協を結ぶ責任の証として、現在も金色のシールが箱の中に入れられ本州方面に送られている。

今金商店街にて

男爵が取り持つ交流

町内の馬鈴しょ生産は、種子用と食用の生産者が完全に分離されている。現在、食用が全部で一四〇戸・四一〇㌶、種子用が原種を含めて五〇戸。一〇〇％町内で生産された更新種子馬鈴しょが使用されている。今金はもともと種子イモを作っていたところなので、徹底した品質管理は当たり前になっている。

生育期間中、品質基準に合っているかどうか農家自ら相互に圃場でチェックをする。収穫後、色や形、皮むけがないかなど外観を徹底的にチェックする。

「美味しさの秘密は、冷涼でしかも昼と夜の気温差が大きく、豊かな土壌に恵まれていること。ライマン化が高く、ほくほく感があって粉をふくのが特徴だ」と、小田島さん。しかし、最近中心空洞のクレームが出るようになって心配だという。圃場によっては過作による地力低下や肥培管理上の問題があるのかもしれない。日本一を守るため一個でも見逃さない対策が必要だということで、農協では町の支援も得て空洞センサーを導入することになった。

日本一の今金男爵を持っていることで、前出の「紙芝居」もそうだが町内外さらに遠く道外の小学生との交流があるという。

滋賀県の小学校とは二〇年前から交流しており、いまでも子供達からたくさん質問を書いた手紙をもらう。こちらからも毎年今金男爵を送って食べてもらっている。「イモ掘り体験にきてもらえれば喜ぶだろうな」と小田島さんは目を細める。

今金町での「品目横断的経営安定対策」への対応が、新たな課題だ。認定農業者は、現時点で年齢六〇歳以下、目標農業所得額六五〇万円以上が要件となっているが、これまでこの要件を満たす者は二〇％程度と極めて少ない状況にある。現在、要件の改定（年齢六五歳以下、目標農業所得額四五〇万円以上）を行なっているが、米価格の低迷が大きく影響し、農家経済が悪化していることから、新たに要件を満たすものの割合が大幅に向上することは望めそうもない。早急な複合化経営対策が必要だ。「どんなに制度の変更があっても米価が下落してもほとんど影響を受けることがない、そんな農業をやっている農家もある。米・野菜・牛の複合経営で、年がら年中労働力を駆使して七〇〇～八〇〇万円の農業所得を確保している。今金は何でも取れる土地柄なので、これがやれるところ。現に町内にいくつかそういう農家が点在している。」とは、今金農業を知り尽くした小田島さんの理想の農業経営像だ。

今金町市街

農業を守る

気象災害にも見舞われ、このところ今金町の農業販売実績は思うように伸びていない。「厳しい環境にあるからこそ町の基幹産業である農業をしっかりと支援しなければ」と今金町役場農林業振興課の中島さんは言う。

町財政が厳しいなか、相次いで打ち出されている大型農業支援がこのことを裏付けている。まずあげられるのが、冷災害から農家を守る農業共済掛金の農家負担額三〇％相当の町費負担。平成十六年度から三ヵ年、毎年約三、六〇〇万円を支援する。相次ぐ災害により農家の負債が増加していることから、借入資金に対する償還利子の助成をこれまでしていたが、より効果が高いものをということで、高額支援に踏み切ったという。また、農協が平成十八年度導入を決めた馬鈴しょ空洞センサーに対する地元負担分の三〇％補助、二、三〇〇万円についても、議会で承認を得て緊急支援を決定した。

支援のあり方について中島さんはこう説明する。「米について例えてみると、今金地区は主産地と比較すると反収が二～三割低い。反当りの収入が主産地で一〇万円とすれば二～三万円足りないということになる。これを農家・農協が複合経営で埋め

ていくという方針を立てるとする。反当り収入一〇万円をあげるために初期投資が必要になり、農家・農協がやれる限りの応分の負担をする。そこまで努力したとすれば、町としても『がんばろう』とする事に支援したい気持ちになる。しかしながら、支援ありきの営農という農家意識を改めていただきたい面もあり、支援後の、自己責任による営農を基本とした創意工夫を期待するとともに、それらの協力体制を行政として整えていきたい」。

瀬棚線跡地と風車（デ・モーレン）

こんな支援もある。農協の玄米調整センターの落成に合わせ、平成十七年に町費でAコープ店舗に精米機を設置した。町産米を町民に食べてもらう地産地消の実践だ。農協がバラで玄米を売り、お客は精米機にかけて今摺り米を持ち帰る。安くて美味しいと好評のようだ。

こうした支援のあり方は、役場と農協の事務レベルで案を作って、助役と専務、次に町長と組合長とで了解に達していくというボトムアップで決定されているという。これまでのところ、町も農協も合併せず単独の道を歩んでいるのでお互いの密着度は高いとのことだ。そうはいっても農協は経済団体、役場はサービス機関なので意見のずれも起こる。農協が間にあることで町民である農家に町からの思いが伝わらないというもどかしさを感じることもあるという。しかし効果的な農業支援は、農協と一枚岩にならない限りできないという思いでいつも行動しているという。

今金「食」ネットワーク会議も、町が予算化して平成十五年度から立ち上げたプロジェクトだ。町内の農産物に付加価値をつけるための食品開発研究会のようなもの。これまで加工品の試食交流会や特産品を販売する「物産祭り」の実施、統一ブランドマークシール（マスコット「男爵くん」）の作成などに取り組んできた。鶴の子大豆を使った「鶴の子豆乳」「親子とうふ」や町内産酒米「吟風」を利別川の清流で醸造した日本酒「万太郎」などの名品が生まれている。

農業は宝・自立の道

今金町は平成十四年以降「檜

山北部4町」、「北渡島」の二つの協議組織に参加し、合併の是非を検討してきたが、平成十六年六月に自立の道を選択し「今金しあわせ丸」として新たな船出を切った。町の広報誌によれば、町長が表明した自立決断の理由のなかに「ふるさと今金がいつまでも今金でありつづけるよう、子孫に繋いでいくことが町民にとって望ましいと改めて感じた」「農業の町であるという気持ちを一つにして、町づくりをしている中で、産業形態が大きく変わる合併では今後の農業の取り組みや課題解決に向け不安がある」ことなどがあげられていた。

町役場を訪問したときに、廊下や階段ですれ違う職員の皆さんから挨拶を交わされて、とても気分が良かったことを旅館の女主人に話したら、「役場（の皆さん）も大変なんですよ、町が自立の道を行くって決めましたから。でも私達は良かったと思っているんですよ、そう決めてもらって」という言葉が返ってきた。町民みんながこの町を育て守っていこうという確かな意志を、この言葉からも感じられるような気がした。

◆◆後　記◆◆

私が北海道に住むことになった時、明治四十年生まれの亡父は、若いときに「シリベシノクニ・カミハカイマップ」出身の友達がいた、と言っていた。聞きなれない地名なのでしばらく何処のことだか見当もつかなかったが、何かの折に利別川の支流にその名前がつけられているのを地図でみつけた。あるいは今金の旧名（アイヌ語）かとも思っていたが、今回いろいろな資料に接して、住吉と呼ばれる地区が「後志の国・上ハカイマップ」らしいことが分かった。

私も自称ブナ愛好家の一人。かつて道南を歩いてブナの森を訪ね回ったことがある。長万部岳から眺めた利別川の源流は、ことのほかブナ探索欲をそそるたたずまいだった。渡島半島のブナの森にもあちこち人の手が入ってしまっているが、利別川の源流も含めて今金町の北縁から大平山・狩場山にかけては、いまでもブナの木が比較的まとまって残っている地帯だ。その広さと北限という貴重さからみて、白神山地に匹敵する価値の高いブナの森だと、勝手に思っている。利別川はブナの森を源流域に持つ北海道で一番大きな川である。清流であることに加えて誇りにして良いことだと思う。

◇　◇　◇

わずかな滞在にもかかわらず、農業を大切にする心と思いやりにあふれた町（ふらっと入った食堂で食べきれないほどの惣菜とコーヒーをおまけして貰ってビックリ）であることをあらためて肌で感じることが出来ました。なお、取材に際しまして、町役場・農協の皆さんには取り込み中にもかかわらず貴重なお話をうかがわせていただきました。心よりお礼を申し上げます。

レポーター
（社）北海道地域農業研究所
研究部長　矢野　実